

百年記念施設の継承と活用に関する考え方

～50年後を見据えた自然・歴史・文化「体感」交流空間としての再生～

平成29年11月

北海道環境生活部
文化・スポーツ局文化振興課

1 趣旨

私たちの北海道には、世界遺産登録をめざす縄文遺跡群をはじめとする歴史的な文化や先住民族であるアイヌの人たちによって培われてきた文化が存在します。さらに、全国各地からの移住者の生活や明治期における諸外国の影響を受け継ぎ、開放的で多様性のある文化が育まれてきました。

道立自然公園野幌森林公園に所在する北海道博物館、北海道開拓の村及び北海道百年記念塔^{※1}は、北海道百年記念事業の一環として整備が進められた施設であり、開設以来、本道が積み重ねてきた歴史・文化や先人の偉業、そして自然に触れることができる場として、多くの人々に利用されてきました。

これらの施設（以下3施設を「百年記念施設」と総称します。）は、現在は、指定管理者制度を活用し、道が一体的に管理していますが、近年のレジャーの多様化や、開設から50年近くが経過したことによる施設の固定化、老朽化により、開設当時に比べ利用者数は減少しています。

来年、平成30年は、この北の大地が「北海道」と命名されてから、150年目となります。節目の年を迎えるにあたり、北海道が歩んできた歴史や育んできた文化に加え、豊かな自然環境を、北海道の大切な宝物として再確認し、次の世代にしっかりと伝えていくことが求められています。

また、2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催や白老町の民族共生象徴空間の開設を機に、さらに拡大が見込まれる国内外からの来訪客に対し、世界に誇れる本道独自の自然・歴史・文化を発信していくことが求められています。

このため、道では、百年記念施設周辺地域をこうした本道の宝物と体感し、交流する空間と捉え、この空間を今後の50年、100年先をも展望しながら、次の世代にどのように引き継いで行くのがふさわしいかを検討し、今後の議論の方向性をまとめました。

※1 北海道博物館（当時：北海道開拓記念館）及び北海道百年記念塔は昭和46年に、北海道開拓の村は昭和58年に一般公開が開始されました。概要は資料1のとおり。

2 検討の経過

平成28年9月に、文化や観光振興、公共政策等の有識者で構成する「北海道の歴史文化施設活性化に関する懇談会」※²を立ち上げ、これまで、現地視察を含む懇談会を5回開催しました。

懇談会では、百年記念施設が抱える課題や今後の取組などについて、老朽化した施設の安全性への配慮や施設のみならずエリアとしての潜在力の評価、さらには、国内外からの誘客促進のためのアイデアなど、幅広い意見をいただきました。

今回、これらのご意見も踏まえ、道として、今後の議論の方向性を示す「百年記念施設の継承と活用に関する考え方」をまとめました。

3 現状と課題

(1) 周辺エリア

百年記念施設が所在する野幌森林公園は、百年記念事業の一環として昭和43年に道立自然公園に指定され、大都市近郊ながら、まとまった面積の森林が残され、さまざまな動植物を観察することができる全国的にも類をみない貴重な場所となっています。

公園内には、百年記念施設のほか、自然を楽しむことができる5箇所の入り口からはりめぐらされた遊歩道や公園利用の拠点となる施設も整備されていますが、案内標識や木道・防護柵などの公園施設の老朽化をはじめ、バリアフリーや訪日外国人旅行者への対応も必要となっています。

このように、このエリアは、本道が積み重ねてきた歴史・文化や自然に触れることができる貴重な場となっていますが、施設の老朽化等により開設当時に比べて利用者が減少しています。

一方で、このエリアを周辺地域も含めて見渡すと、近隣には、4つの大学のほか文化、スポーツ施設も充実しており、自然豊かで各種施設が集積

※² 懇談会の開催状況は、資料2のとおり。

している利点を最大限に活かせる可能性^{※3}があります。

（２）北海道博物館（旧：北海道開拓記念館。以下「博物館」といいます。）

同博物館は、北海道開拓記念館（昭和46年開館）と道立アイヌ民族文化研究センター（平成6年開所）を統合し、平成27年4月に新たに開設した総合博物館です。

統合に合わせ、展示の全面改訂や特別展の企画、館内のバリアフリー化などの大規模なリニューアルを進めた結果、平成27年度の総合展示室の利用者数は、統合前の2.7倍、平成28年度も同2.0倍となり、当初の目標を超える利用者を得ています。

今後は、北海道全体をミュージアムに見立て、地域の歴史や様々な文化を発掘・再発見し発信・継承する「北海道ミュージアム構想」の中核的博物館としての機能強化や道民参画型博物館の実現に向けた取組など、更なる博物館の魅力向上に努める必要があります。

（３）北海道開拓の村（以下「開拓の村」といいます。）

開拓の村は、昭和58年に開設した野外博物館であり、主に明治から大正にかけて建設された52棟の建造物を道内各地から移設復元し、展示しており、当時の人々の暮らしや生活文化に触れることができます。

村内では、動態展示として国内唯一の馬車鉄道（馬そり）を営業しているほか、指定管理者やボランティアによる解説、当時の年中行事の再現など各種イベントを実施しています。

これまでに延べ820万人の入村者を迎え入れています。年間の利用者数は、開設当初に比べ減少傾向にあり、利用者の確保対策を積極的に進める必要があります。

※3 野幌森林公園を中心とするエリアには、図書館、埋蔵文化財センター、野幌総合運動公園の道立の文化・スポーツ施設が設置されているほか、4つの大学が隣接しています。隣接する施設の状況は、資料3のとおり。

また、建造物の老朽化が進み、現在は、一部の建造物や施設の利用を禁止しており、計画的な修繕やその財源確保が大きな課題になっています。

（４）北海道百年記念塔（以下「百年記念塔」といいます。）

百年記念塔は、北海道100年である昭和43年に着工し、２年後の昭和45年に完成、翌46年４月に一般公開が開始されました。現在では、地域のランドマークとして、周辺の広場とともに道民の憩いの場となっています。

建設は、北海道百年記念塔建設期成会が行い、昭和45年に道に寄附されました。建設費用は約５億円であり、そのうち２分の１は、道民などからの寄付によって賄われています。

これまでに相当の経費を投入し保守管理を行ってきましたが、建設から50年近くが経過し老朽化が進展する一方、近年は、塔上層部から錆片が落下するなどの劣化が進み、平成26年７月からは、一般利用者の立入りを禁止しています。今後も維持していくためには多額の費用負担が見込まれる状況となっています。

このようなことから、建設の目的を踏まえつつ、安全性や将来世代の負担も見据えて、様々な観点から、今後のあり方について十分な検討を進める必要があります。

４ 今後の方向性

（１）基本的な考え方

利用者数の減少といった課題の解消は一朝一夕には進みませんが、次の二つの視点からみると、大きな可能性があります。

一つは、道民ニーズの伸びしろです。我が国では、高度成長期を経て心の豊かさを求める時代に入ったと言われて久しくなりますが、自らの住む地域の自然、歴史、文化に対する意識も高まりを見せています。内閣府の実施した世論調査によれば、本道は、歴史的な建物や遺跡を直接鑑賞した

人の割合が全国10ブロックの中で最も低くなっていますが、それは大きな伸びしろと考えることもできます。

二つ目は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックや民族共生象徴空間の開設を機に、更なる訪日外国人の取り込みが期待されることです。

訪日外国人は、自国と異なる日本固有の自然、歴史、文化、生活に強い関心を持っています。特にリピーターには、その傾向があります。都市近郊に残る雄大な自然の中にある博物館や開拓の村は、世界に誇ることができる本道固有の自然、歴史、文化の発信拠点として、訪日外国人の受入を通じた地域活性化へ貢献することが十分可能な施設です。

今後の百年記念施設は、このような視点に立ち、道民にとって大切な場として、さらには訪日外国人にも魅力的な自然・歴史・文化の発信拠点とすることが必要です。

このため、道では、百年記念施設を、施設ごとの点としてではなく、自然豊かな周辺地域を含めた空間として捉え、隣接する他の文化・スポーツ施設等とも連携しながら、「学ぶ」、「触れる」、「集う」、「繋がる」ことのできる**自然・歴史・文化体感交流空間**として再生することをめざします。

なお、個々の百年記念施設の方向性は次のとおりです。

（２）各百年記念施設の方向性

ア 北海道博物館

平成27年度のリニューアルにより施設や組織の整備が進んだことから、今後は、「北海道博物館の基本的運営方針」^{※4}に基づき、総合博物館として備えるべき基本的機能の充実はもとより、道民をはじめ様々な人々が繰り返し訪れ、親しまれる道民参画型博物館の実現や「北海道ミュージアム構想」の中核的博物館としての役割強化に着実に取り組みます。

※4 平成22年9月に策定した「北海道博物館基本計画」を踏まえ、北海道博物館が果たすべき社会的使命を明文化するとともに、今後の博物館活動の指針として、平成27年3月に策定。

また、アイヌの人たちが育んできた有形・無形の文化などに関する専門的な研究組織を有する道立の総合博物館として、その研究成果を活かし、多文化共生社会の実現に貢献します。

このほか、民間企業や道内外の博物館との共同事業、大学や試験研究機関との共同研究のため、外部資金の効果的な受入、活用に努めるとともに、住民や学校、企業などとの幅広い連携をもとに、地域に支えられる博物館として積極的な活動を展開できる仕組み作りを進めていきます。

イ 北海道開拓の村

開拓の村は、本道の開拓当時の歴史を学び生活を体験できる唯一の野外博物館であり、今後も、北海道の宝物として、保存、伝承していく必要があります。

一方で、野外博物館の宿命として展示建造物は、積雪寒冷の気象条件により老朽化が進む中、近年は予算のみならず、補修に必要な資材や技術者の確保が困難になっており、十分な修繕が行えない状況が続いています。

利用者の満足度を高めるためには、施設の適切な修繕が重要であり、今後は、代替素材を活用した修繕手法の導入や、PPP^{※5}やPFI^{※6}、クラウドファンディング^{※7}など、民間の資金や活力の導入の可能性について検討を進めます。

また、訪日外国人の入村者は増加傾向にありますが、その伸びは、全道の増加率を下回っていることから、季節毎の気候や景色の変化に富む

※5 「PPP（パブリック・プライベート・パートナーシップ）」：公共施設等の設計、建設、維持管理、運営等を行政と民間が連携して行うことにより、民間の創意工夫等を活用し、財政資金の効率的使用や行政の効率化等を図るもの。

※6 「PFI（プライベート・ファイナンス・イニシアティブ）」：民間の資金や経営能力・技術力（ノウハウ）を活用し、公共施設等の建設・改修・更新や維持管理・運営を行う公共事業の手法であり、PPPの一類型。

※7 個人や企業、その他の団体などが、インターネットを介して、寄附、購入、投資などの形態で、不特定多数の支援者から、少額の資金を調達する仕組み。群衆を意味する「crowd」と、資金調達を意味する「funding」を組み合わせた造語。

野外博物館の強みを活かしながら、訪日外国人も惹きつける体験型イベントの実施などの受入対策の強化を図ります。

開拓の村を魅力的な歴史・文化の発信拠点として強化することで、新たな利用者層の確保や道民に対して歴史的建造物とのふれあいの機会を提供することが可能となります。

ウ 北海道百年記念塔

百年記念塔は、今日の北海道の繁栄を築き上げた幾多の「先人の偉業を長く後世に顕彰し、慰霊の誠を捧げるとともに、輝く未来を創造する決意の表徴として」^{※8}建設されたモニュメントですが、前述のとおり、近年、老朽化が進み安全確保のため、平成26年7月より立入禁止となっています。今後も維持していくためには、多額の費用負担が見込まれる状況となっています。

このため、幅広く道民のご意見も踏まえた上で、安全性や将来世代の負担軽減、周辺施設との関連など様々な観点から引き続き検討を進めます。

その際、百年記念塔入口付近にある彫刻家佐藤忠良氏制作によるレリーフを活かした新たなモニュメントの設置など、本道の歴史に対する思いを引き継ぐ手法も検討していきます。

なお、今後の検討によっては、百年記念塔は様々な形態が考えられますが、当該地域の景観にも十分配慮することとします。

5 今後の検討の進め方

現在、国においては、「日本再興戦略2016」等^{※9}、文化芸術資源を活用した経済活性化を掲げ、文化を広い概念で捉え、観光等への波及を重視しています。平成28年3月に策定された、世界が訪れたくなる日本をめざした「明

※8 北海道百年記念塔建立記（北海道百年記念塔揭示）から引用

※9 「日本再興戦略2016」：2016年6月に新成長戦略として閣議決定され、その具体的施策として、「スポーツ・文化の成長産業化」を掲載。

日の日本を支える観光ビジョン」^{※10}においても、「とっておいた文化財」を「とっておきの文化財」として活用することや、その支援を打ち出しています。

こういった国の動向も注視しながら、世界に誇れる北海道独自の自然・歴史・文化に道民が直に触れられるとともに、これらを国内外に発信し、しっかりと次の世代へ継承していくことが求められます。

道では、この役割の中核を担うことができる百年記念施設を、施設ごとの点として捉えるのではなく、自然豊かな周辺地域を含めた空間として捉え、隣接した他の文化・スポーツ施設等とも連携しながら、**自然・歴史・文化体感交流空間**として再生することをめざします。

道では、この考え方を基に、様々な機会を通じて幅広くご意見を伺いながら、さらに議論を深め、北海道150年の節目となる平成30年までに再生に向けた構想を取りまとめて参ります。

※10 「明日の日本を支える観光ビジョン」：国が、「観光先進国」への新たな国づくりに向けて、平成28年3月30日に「明日の日本を支える観光ビジョン会議」（議長：内閣総理大臣）において策定した新たな観光ビジョン。

北海道博物館の概要

1 主な沿革

昭和39年（1964）	開道百年記念事業協議会で開拓記念館の設置を決定
昭和43年（1968）	「開拓記念館資料収集基本方針」を決定 北海道開拓記念館起工式
昭和46年（1971）	開館
平成 3年（1991）	常設展示全面改訂
平成13年（2001）	赤れんが庁舎内に「北海道の歴史ギャラリー」オープン
平成27年（2015）	北海道博物館リニューアルオープン 北海道開拓記念館と道立アイヌ民族文化研究センターとの統合

2 設置目的

北海道の自然、歴史、文化に関する資料を収集保存、調査研究し、それらを体系的に整えるとともに、総合展示を核とする展示活動や教育普及活動事業を通して、北海道の自然・歴史・文化に関わる遺産を後世に伝える役割を果たしている。

3 コンセプト

北海道を代表する「総合博物館」
道民とともに歩み、愛される「道民参画型博物館」
北海道の「中核的博物館」

4 組織・施設の概要等

（1）職員数（平成29年4月1日現在）

区分	正職員	非常勤、臨時職員	計	備考
道職員	35人	18人	53人	学芸員・研究職員 計30人
指定管理者	3人	1人	4人	
計	38人	19人	57人	

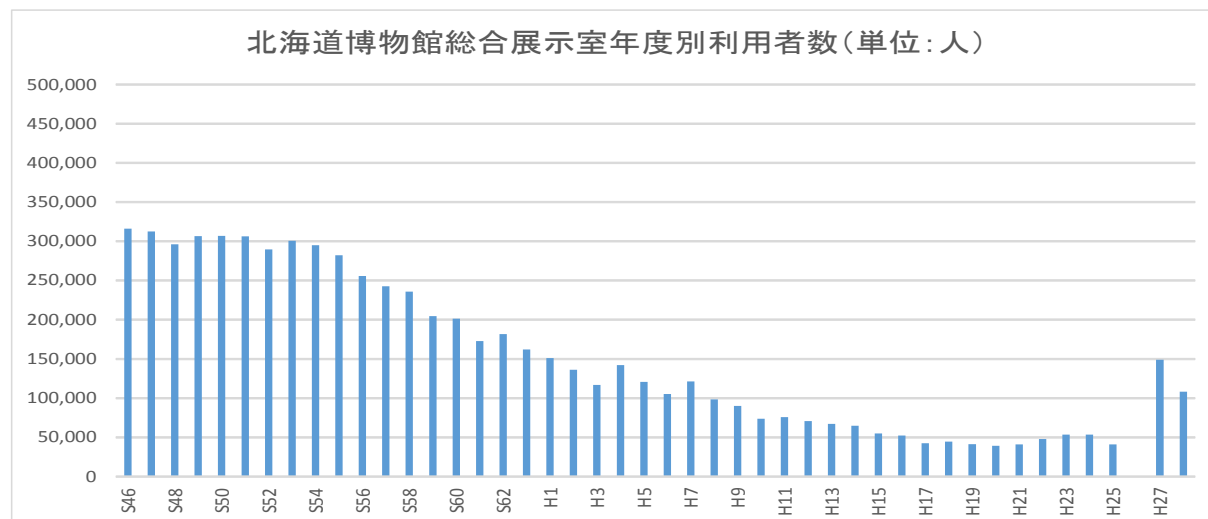
（2）収蔵資料数 184,233件（平成29年9月末現在）

（3）構造 RC（一部SRC）造り 地上2階、地下2階

（4）延床面積 12,947㎡

（5）館内施設 総合展示室、特別展示室、はっけん広場、図書室、記念ホール、講堂、休憩ラウンジ、ミュージアム・カフェ等

5 入館者の状況



北海道開拓の村の概要

1 主な沿革

昭和42年（1967）	開拓記念建造物等の移設による野外博物館構想が決定
昭和46年（1971）	道立野幌森林公園の公園計画に野外博物館の設置を告示
昭和47年（1972）	北海道開拓の村建設基本構想の策定
昭和48年（1973）	移設建造物等資料収集方針の決定
昭和52年（1977）	開拓の村建設工事起工式
昭和58年（1983）	開拓の村オープン

2 設置目的

社会・経済の急速な発展に伴って失われていく、開拓当時の大切な建造物や人々の生活を復元し、保存し、開拓過程における生活文化に対する認識を深める。

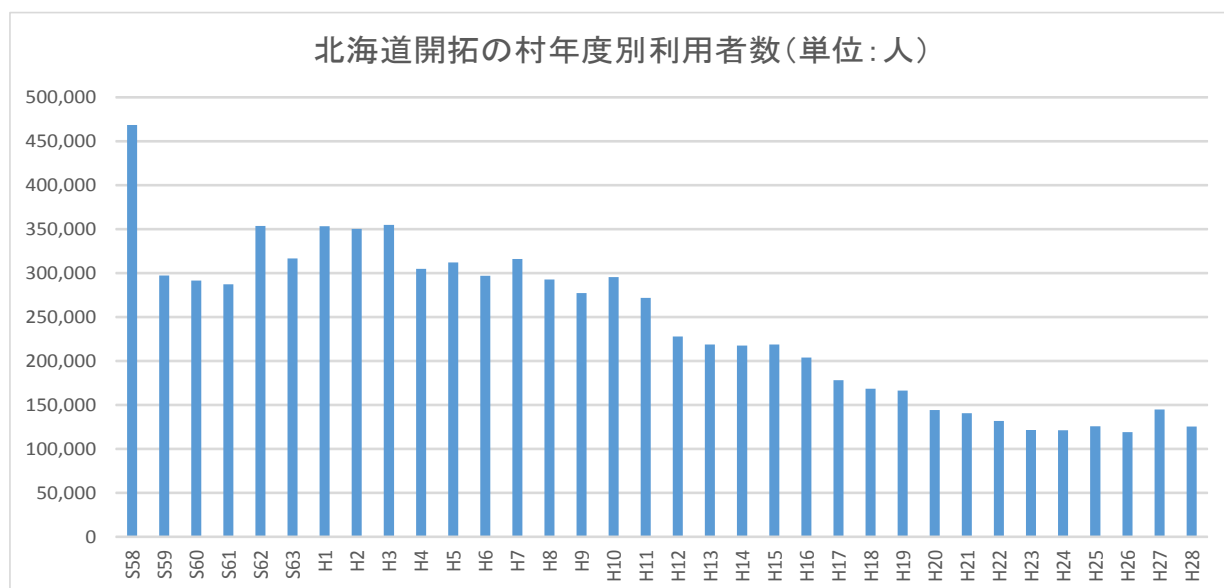
3 コンセプト

北海道開拓の歴史を示す建造物等を保存し、展示する。
 北海道の開拓過程における生活様式、年中行事等に係る催しを行う。
 開拓の村の展示物に関する案内書、解説書等を作成し、配付する。

4 施設の概要等

区分	復元施設	再現施設	修景施設	計
市街地群	25棟	4棟	2棟	31棟
漁村群	2棟	－	2棟	4棟
農村群	8棟	1棟	5棟	14棟
山村群	－	1棟	2棟	3棟
計	35棟	6棟	11棟	52棟
その他	体験学習棟1棟、食堂1棟、吊り橋1			
敷地面積	54.2ha			

5 入村者の状況



北海道百年記念塔の概要

1 主な沿革

昭和41年（1966）	北海道百年記念事業実施方針において記念塔建設を決定
昭和43年（1968）	建設工事の着工
昭和45年（1970）	完成
昭和46年（1971）	一般公開

2 設置目的

本道の発展につくした有名無名のすべての先人に対する感謝の心と北海道の輝く未来を創造する決意と躍進北海道の姿を力強く象徴するものとして、高さも量感においても雄大な記念塔を建設する。

3 コンセプト

道民がみんなで築く躍進北海道のシンボル（象徴）
道民の巨大なエネルギーを結集し、天をついて限りなく伸びる発展の勢いを表す
高さは北海道百年にちなみ100メートル

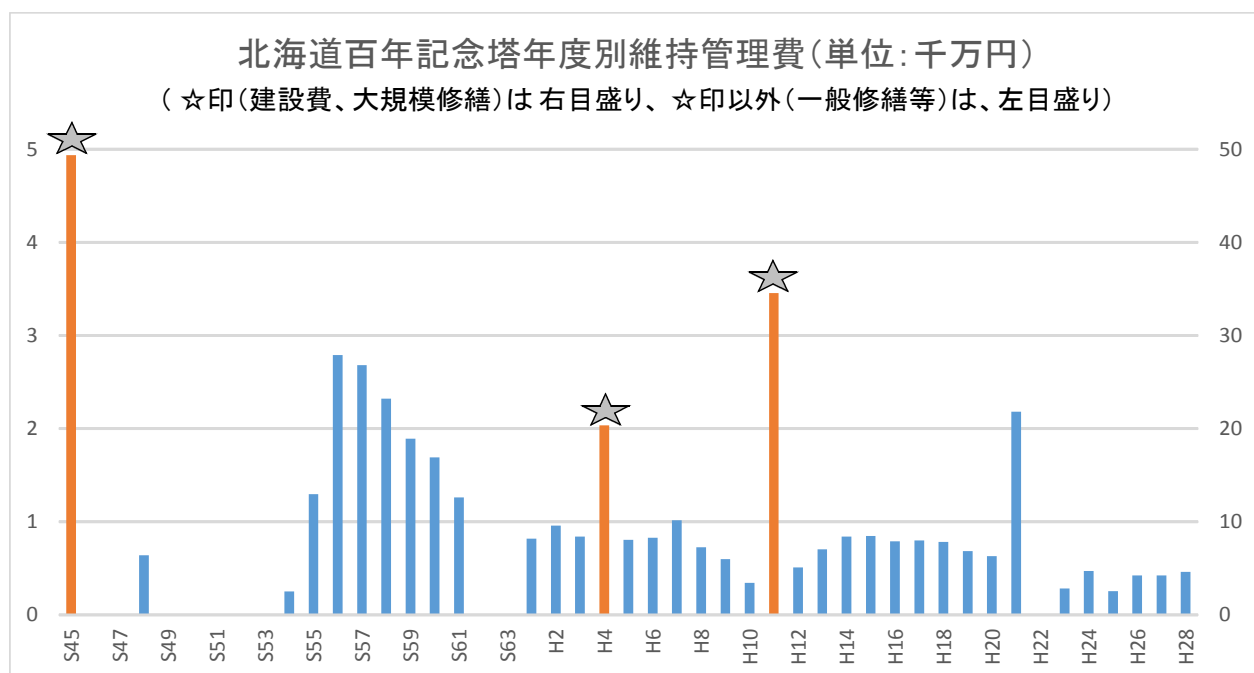
4 施設の概要等

- （1）構 造 鉄骨トラス構造 地上25階建て
- （2）外装材 無塗装耐候性高張力鋼板
- （3）高 さ 100m
- （4）総工費 約5億円（半分は道民等からの寄附）
- （5）設 計 井口 健 氏（今金町出身／（株）久米建築事務所札幌支社）
- （6）施 工 伊藤組土建株式会社
- （7）壁面レリーフ 「開拓」（佐藤忠良氏）
（北海道庁玄関ホール壁面レリーフ原型）

5 保守管理の状況

- （1）これまでの維持管理経費等（S45 ～ H28）

建設費	補修費	その他（保守計画策定）	合計	備考
493,680千円	862,035千円	14,934千円	1,370,649千円	



(2) 今後、想定される維持管理経費等

平成30年度を起点として、今後50年間、維持管理する場合の経費を専門業者に委託し、算出※11,12した。

ア 原状復帰した場合 約28.6億円※13

- ・ 従前どおり、展望台として維持管理
- ・ 今後、部材の腐食等による不測の落下事故を完全に防ぐことは、物理的に不可能に近いことから、その対策として、立入禁止フェンスの設置、屋根付き通路の設置、見学者エリア内装工事等が必要。

イ 現状維持する場合 約26.5億円

- ・ 記念塔をモニュメントとして維持管理
- ・ 原状復帰の場合と同様に、立入禁止フェンス等の対策は必要。

ウ 除却（基礎を含む全てを除却） 約4.1億円※14

- ・ 記念塔（円形池を含む）を除去する場合。
- ・ 基礎を含む全てを除去し、埋め戻しをした後、表層部分に張り芝を施工する。

※11 消費税及び地方消費税相当額は含んでいない。

※12 経費は、平成29年9月時点の単価を利用し算出しており、今後、資材費、人件費等の価格の推移によって、維持管理等の経費は増加する可能性がある。

※13 記念塔は、「工作物」であるため、現行法では耐震化の義務はないが、一般利用者を立ち入りさせるとなると上記経費に加え、耐震化診断や耐震化工事が必要になると思われる。

※14 基礎を全てではなく、地盤面より1 mまで除却する場合は、約2.9億円を要すると算出されているが、このケースは、廃棄物処理法では原則認められていない。

北海道の歴史文化施設活性化に関する懇談会の概要

1 目的

北海道百年記念施設として設置された北海道博物館及び百年記念塔は、昭和46年に、また、北海道開拓の村は昭和58年にそれぞれオープンし、これまで道内外の多くの人たちに利用され今日に至っている。

平成30年に北海道150年を迎えるにあたり、道民の貴重な財産である当該施設を将来に向けて、どのように後世に伝えていくことが相応しいのか、学識経験者等から幅広く意見を聴取するため、「北海道の歴史文化施設活性化に関する懇談会」を開催する。

2 議題

- (1) 百年記念施設の活性化と安定的な運営を図るための方策について
- (2) その他、百年記念施設の活性化と安定的な運営に関し、必要な事項

3 構成

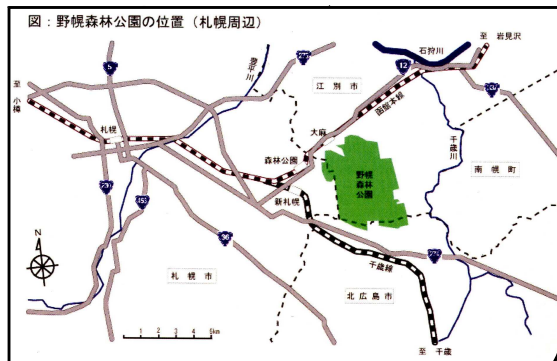
氏 名	所属・職名
臼 井 栄 三	(国)北海道教育大学岩見沢校 特任教授
戎 谷 侑 男	(株)シービーツアーズ 代表取締役社長
佐々木 亮 子	(有)アールズセミナー 代表取締役
中 田 美知子	(学)札幌大学 客員教授
西 吉 樹	(一財)北海道歴史文化財団 業務執行理事法人本部長
西 山 徳 明	(国)北海道大学観光学高等研究センター センター長
山 崎 幹 根	(国)北海道大学大学院法学研究科・法学部 教授

4 開催状況

- 第1回 平成28年10月28日（金） 道庁赤れんが庁舎
- 第2回 平成28年11月26日（土） 北海道博物館（現地調査含む）
- 第3回 平成29年 2月17日（金） 道庁赤れんが庁舎
- 第4回 平成29年 6月 7日（水） 道庁赤れんが庁舎
- 第5回 平成29年10月31日（火） 道庁別館

百年記念施設の周辺施設

図：野幌森林公園の位置（札幌周辺）

道立図書館
(道教育委員会所管)道立野幌総合運動公園
(道建設部所管)道立埋蔵文化財センター
(道教育委員会所管)北海道百年記念塔
(道環境生活部所管)野幌森林公園自然ふれあい交流館
(道環境生活部所管)北海道博物館
(道環境生活部所管)北海道開拓の村
(道環境生活部所管)

集団施設地区（記念施設地区）

森林地区

百年記念施設の継承と活用に関する考え方の概要

～50年後を見据えた自然・歴史・文化「体感」交流空間としての再生～

○百年記念施設：北海道博物館、北海道開拓の村、北海道百年記念塔

1 趣旨

- ・ 来年は北海道 150 年の節目の年を迎える
- ・ 北海道の自然、歴史、文化を次の世代に引き継ぐ
- ・ 2020 年以降も見据えて世界に誇れる本道独自の自然・歴史・文化を発信



この貴重な空間を今後の50年、100年先をも展望しながら、次の世代にどのように引き継いでいくのかを検討し、今後の議論の方向性をまとめる。

2 検討の経過

平成 28 年 9 月に文化、観光振興、公共政策等の有識者による懇談会を設置し、幅広い意見を伺った（5 回開催）。

3 課題と今後の方向性

区分	課題	今後の方向性
エリア全体	本道が積み重ねてきた歴史・文化や、自然に触れることができる貴重な場であるが、施設の老朽化等により、開設当時に比べて利用者が減少している。	施設ごとの点としてではなく、自然豊かな周辺地域を含めた空間として捉え、隣接する他の文化・スポーツ施設等とも連携しながら、自然・歴史・文化「体感」交流空間として再生をめざす Keyword 学ぶ、触れる、集う、繋がる
北海道博物館	・ H27 年にリニューアルし、利用者が増加したが、今後も更なる魅力向上が必要	・ 本道の中核的博物館、道民参画型博物館として、更なる魅力向上に努める ・ 2020 年に開設される国立アイヌ民族博物館等との幅広い連携
北海道開拓の村 (S58 年～)	・ 利用者の減少傾向 ・ 老朽化が顕著 ・ 修繕の資材・技術者不足	・ 多言語対応や魅力的な体験型イベント実施を通じて、訪日外国人を惹きつける ・ 民間の資金や活力の導入可能性の検討 ・ 代替素材を活用した修繕手法導入
北海道百年記念塔・記念塔前広場 (S45 年完成)	・ 老朽化が顕著（立入禁止） ・ 今後も維持していくためには多額の費用が必要	・ 安全性や将来負担、周辺施設との関連など様々な観点から引き続き検討 ・ 佐藤忠良氏のレリーフを活かした新たなモニュメントの設置など本道の歴史に対する思いを引き継ぐ手法も検討

4 今後の検討の進め方

この考え方を基に、様々な機会を通じて幅広く意見も伺いながら、議論をさらに深め、北海道150年の節目となる平成30年までに再生に向けた構想を取りまとめる。